

英「撃ちてしまむ」の思想が徹底していて、外国
人との接触を不潔なものと思っていたらしいのです。

私の前の親友は私の身代わりとなって南方海域で戦
死し、もう一人の親友は死ぬ思いはしたものの外遊を
してきました。これが人生の縮図と言えるでしょう。

戦後五十余年経ちましたが、あんな戦争はもうコリ
ゴリです。平和な日本に少しでも役立ちたいと願いつ
つ終わります。

南の海の水も冷たかった

愛知県 加藤 仲二

私の略歴・戦歴

昭和十七年一月十日 大竹海兵団に入団

四月

巡洋艦「鬼怒」に乗艦、第二南

遣艦隊として西南太平洋海域の作

戦に参加

昭和十八年四月

横須賀海軍砲術学校入校

八月 空母「飛鷹」に乗艦

昭和十九年六月二十日 マリアナ海沖海戦にて沈没

駆逐艦に救助される

八月 空母「瑞鶴」に乗艦

十月二十五日 比島沖海戦にて沈没

駆逐艦に救助される

十一月より松山航空隊勤務

四国の宿毛にて終戦を迎える

時には、人の命も枯れ葉が舞うように、一瞬のうち
に大勢の人の命を失う時もある。これが戦争という無
残で悲しい嵐である。私はこの恐ろしい嵐に二度も出
合いながら、生き抜くことのできた幸運に恵まれた。

ある夜、電話のベルが鳴り、孫が電話に出て「おじ
いちゃん電話だよ」と呼び、早速電話に出た。「私は
豊川の佐々木です、私は空母「瑞鶴」に乗っていた
佐々木兵長の兄です。ある人から加藤さんが「瑞鶴」
に乗っておられたと聞きましたので、もし弟のことで
知っていることがありましたらお話を聞きたいと思い

ましてお電話しました」とのことであった。

早速、豊川市の佐々木さん宅に行き、当時の模様を詳しく話した。事実は小説よりも奇なりとの言葉があるが、私と佐々木さんとの出会いも別れも物語となる。

二人は共に昭和十八年八月、横須賀海軍砲術学校を卒業し、伊豆大島にて魚雷攻撃を受けて修理中の空母「飛鷹」の乗員となる。修理完了後、直ちに西南太平洋海域に出撃する。「飛鷹」最後の作戦参加はサイパン沖海戦であった。戦局は日増しに日本海軍不利となってきた。北方海域はアッツ島、キスカ島の撤退、南はガダルカナル、ムンダ、マキン島、タラワ島の撤退で、今や内南洋のマリアナ群島海域が決戦場となってきた。もし、サイパン島が敵の手に落ちれば、B29の爆撃で日本本土は焼土となる。なんとしても、これだけは阻止せねばと米海軍に短期決戦を挑む。これが日本海軍全兵力のマリアナ沖海戦だ。

空母「飛鷹」は第二群として小沢治三郎中将指揮下となる。この戦いで日本の虎の子の空母「大鳳」をは

じめ「翔鶴」「飛鷹」は撃沈され、「隼鷹」は傷つき、海軍航空兵力の大半を失い、完敗を喫して敗退する。

その時、私は五番砲の一番砲手、佐々木さんは高射機関銃の配置であった。雷撃機の攻撃で五番砲と三番砲の中間の缶室に直撃、缶室爆発、そして火災を誘発、飛行甲板は火の海となった。私は燃える飛行甲板を重傷を負った戦友を伴って後甲板より退艦した。

暗い海の中、味方の駆逐艦に運よく助けられて生還することができ、三ツ子島に收容されて互いに無事を喜んだ。

それから一カ月後に二人は、運がよいのか悪いのと同じ空母「瑞鶴」の乗員となった。敗戦の色濃きとき、一番敵機の目標となる空母の乗員は、生きる望み少ない特攻隊員だ。「えーいままよ、どうせ無い命なら日本一の空母が墓場なら」と慰めあった。それから二カ月、豊後灘にて戦闘訓練を繰り返して次期決戦に備える。

戦機は熟す、食糧・燃料・弾薬の搭載を終わって残存日本海軍の艦船部隊が別府沖に集結する。あのマリ

アナ沖海戦出撃時の海を圧して進んだ連合艦隊の面影は今いずこ、淋しい姿で戦場に向かう。艦隊は静かに輪形陣を組んで豊後水道を後にする。暮れゆく祖国の山々に別れを告げる兵士の姿も心なしか淋しく思われる。今は戦局の暗さが兵士の胸に影を落とすのか、永年我々を育んでくれた故郷に、また絶ち難き肉親の愛に別れを惜しむときだからか。

こうして昭和十九年十月二十五日、小沢機動部隊の旗艦として「瑞鳳」「千代田」「千歳」を従えてフィリピンのエンガ岬沖に出撃、ハイゼル提督の機動部隊を引き付けた。

二十五日早朝、「総員配置に就け！」と艦内拡声器が叫ぶ。「ただ今、水上艦隊はレイテ湾に突入、敵水上部隊と交戦中」と知らせる。艦橋に戦闘旗が揚がる。「皇国の興発この一戦に在り 各員一層奮励努力せよ」と艦内放送、一瞬兵士の心は緊張と興奮に包まれる。時を経ずして対空戦闘のラッパが鳴る。右に左に遙か彼方に、敵機が編隊を組んで攻撃隊形を取っている。戦の前の静けさで全員が無言、班長が一人「落

ち着け、落ち着け」と繰り返す。勝つか負けるか、生か死か、人間緊張の時の長さを感ずるときはない。

「撃ち方、始め！」、飛んでくる敵機は群がって攻撃してくる。上空からは艦爆機が、水平方向からは雷撃機が襲いかかる。高角砲が轟く、二十五ミリ機銃が火を噴く。爆弾が炸裂する、魚雷が命中する。火薬の臭いと煙と破裂音と間断なく突撃を繰り返す敵機の爆音と、近代兵器の凄絶なる戦いが展開されている。二度目の戦闘で恐ろしさも無残さも体験はしたものの、生と死の戦いは敵への憎しみを増す。

鉄兜は面倒と日の丸の鉢巻きに替えた。撃って撃って撃ちまくった。砲身が焼けるほど撃った。ドカンと物凄い音と同時に艦全体が激しく揺れた。やられたな魚雷か爆弾かに、艦は何ごともなかったように走っている。

第一波攻撃が終わった砲身は、赤くただれて見る影もない。海軍では大きな海戦のときには酒保物品が各戦闘配置に配給される。酒保物品とは兵員が夕食後に求める酒や菓子類のことで、その時には金も払うこと

なく自由に食べることが出来る。砲台長が「おい、敵さんの来ない間に腹造りをしておけ！」と言われ、各自好きな食べ物を食べた。私がミルクコーヒーを半分ほど飲んだときに第二波攻撃が始まった。飲みかけのコーヒーを海の中に捨て、敵機に立ち向かった。今度の攻撃は物凄い激しきだった。

魚雷が炸裂する、爆弾が命中する、艦は地震と雷が同時に来たようだ。上下左右に壊れるように激しく揺れる。断末魔と表現をするならこのことか、砲塔の中は火薬の煙で息が苦しい。

艦が十五度ほどに傾きだした。速力はまだ十五ノットほどで走っている。この状態ならまだ戦場から離脱して内地に帰ることが出来ると思っていると艦内放送が「本艦は燃料のある限り敵陣に向かって突入を決定する」と告げる。一瞬皆の顔色が変わった。人間が生きる望みを完全に断ち切るとき絶望が諦めに変わる。

何ひとつ戦闘力の無い空母が傷ついてなお敵陣に向かう姿は、悲惨というより哀れである。誰一人として

愚痴も言わず、ただひたすら死地に向かって直進する、千数百人の運命を乗せて。敵機は攻撃を緩めない。傷ついた獲物に最後の攻撃を繰り返してくる。

「砲台長、後部弾庫の浸水で弾がありません」「困ったな、弾がなくては戦いは出来ん」と。「加藤は兵隊七人ほど連れて前部弾庫から弾丸を持ってくるように」と言われた。飛行甲板は危険だから下の通路から行く。艦内電灯はすでに消えて真っ暗な通路を私の持った懐中電灯を頼りに進む。艦は直撃弾や至近弾で地震地帯を行くと同じで、恐ろしいというより生きた心地がしない。今艦が沈むと脱出する方法はない。先に立つ指揮者の心は激しく揺れる。

艦は万一の浸水を最小限に防ぐため一室一室の壁はハッチで仕切られている。ハッチの前でコンコンと叩いて合図を送る。ハッチについている番兵が「誰だ」「艦橋に用事があるから開けてくれ」と頼んで次へと進む。

いかに自分の戦闘配置とはいえ地震と雷と炸裂音との地獄の中で、いつ艦は沈むか解らない。それを知ら

せてくれる人もいない。退艦命令も知ること無く、暗闇の中で艦と運命を共にするのかと察するとき、同じ軍人でありながらハッチ番兵の精神力と責任感の強さに驚嘆した。ハッチ番兵の幾人かは連絡のないまま死んで行ったであろう。

やっと艦橋にたどりつき飛行甲板に出て驚いた。数多くの負傷者がうめいていた。手の無い者、足が飛んでしまった者、腹が破裂して内臓が露出してなお生きている者、息を引き取り冷たくなっている者、それらの無残な姿を見たとき、俺は傷つくならばひと思いに死にたいと思った。

飛行甲板に上ったときには状況は一変していた。艦は停止して大砲を撃つことの出来ない状態で、弾丸の必要もないので空しい気持ちで飛行甲板を歩いて自分の戦闘配置に帰った。

やがて艦は傷つき航行不能となる。暫く静けさを取り戻す。遙か彼方に、「千代田」か「千歳」か遠くで確認は出来ないが、黒煙を噴き上げながらのろのろとのたうち回るように見える。恐ろしさも悲しさも通り

越して、敵機に対する憤りが湧いてくる。艦は次第に傾き、総員退艦も近付く。総員退艦の時がきた。

一人の兵士が飛行甲板に座っている。「早く飛び込まないと艦が沈むぞ」「泳げません、艦に残ります」と去りゆく戦友たちを見送っていた。泳げないとはいえ、あまりにも落ち着いた姿に「それでは行くぞ」と慰めの言葉も無のまま飛び込んだ。海水が激しい勢いで格納庫に流れ込んでくる。激流に吞まれまいと必死に艦から遠ざかった。

ほっとして後ろを振り向いたら、全長二百数十メートルの巨艦が艦尾より垂直になっていた。飛行甲板に収容されていた多数の負傷者も含めて、雪崩のように前甲板から後甲板に落下する。この凄絶な一瞬は地獄だ。

「瑞鶴」は日本海軍の誇る空母であった。輝かしい戦歴と戦功を持った空母が一瞬のうちに跡かたも無く消えた。心に空しさと悔しさが残る。

飛行機を持たない空母が戦場に囿り艦隊としての出撃はなによりも悲惨だ。乗員も、飛行機のない空母で

戦場への出撃は無念の極みであった。

戦場からの危機は去ったが、これからどうして生き抜くか。見渡す限りの大海原には泳ぎ着く島影はどこにも無い、味方の駆逐艦の救助を待つだけ。制空権を持ったグラマン機が、朝から我が物顔で飛んでいる。

駆逐艦が停止して浮いている兵士を救助する。グラマンがそれを発見して襲いかかる。駆逐艦が逃げる、グラマンが追いつがる。急降下爆撃機が編隊を組んで襲いかかる。一瞬高い水柱が昇る、駆逐艦が見えなくなる。今度は撃沈されたかなと思っていると、水煙がすうっと消える、駆逐艦の姿が何事もなかったように走っている。

重油の海の中で泳いでいる。誰の顔も黒くなって見分けがつかない。目と歯が白い。眉毛に重油が付着する。それが少しずつ目の中に入る。目が痛い。時折、重油と海水を一緒に呑み込む。吐き気がする。苦闘の連続である。

浮いている小さな板切れで筏を造り、その上に一人乗り、皆で筏が壊れないように支え、上着を脱いで打

ち振り駆逐艦に存在位置を知らせる。これをグラマンが見つけて攻撃してくる。素早く潜って逃げる。長い間泳いでいると足がけいれんする。大きく息を吸い込みながら足をマッサージする。そのとき、神からの授かりものか、目の前に味噌樽が流れてきた。良いものが来たと拾い、水を出して樽の底を抱いて足で水かきすると浮力がついて長時間頑張れそうだ。

下士官と若い兵隊が苦しそうに必死になって泳いできた。もう長いこと泳ぐことは出来まい。下士官が一生懸命に励ましている。こんな時、あまり近寄ると危険だ。近寄らないよう離れる。樽を見つけた下士官に「おい、この兵隊に樽を譲ってくれんか」と頼まれた。命がかかる大切な樽を譲ることは厭な気がしたが武士の情けで渡してやった。若い兵隊はその樽を上手に利用することは出来なかった。

かくして幾時間も泳いだ時、偶然というか神の引き合わせか、あの広い太平洋の真っ只中で、佐々木兵長が「加藤生きていて良かったな、あの近くの駆逐艦に泳いでいくか」と言われた。「佐々木さん、あの駆逐

艦には幾度近付いても助けられないから別の艦にするよ」と言うと、「そうか残念だな、せっかく一緒になれたのにまた別れるか、では元気で生き抜けよ、今度会う時は呉軍港で」と右と左に別れた。「飛鷹」以来生死を共にした戦友との永の別れになろうとは、人の運命とは一寸先は闇だ。

佐々木さんと別れてからも、幾度か海の底に沈みかけた。俺の命も終わりに近づいたかな。あまりにも激しい戦いと苦しさに出合い、死への恐怖は少ないながらも心の片隅には神仏に一縷の望みを託すことも否定しない。妻子は無い、親兄弟に対する想いは無い、と言えば嘘になる。それよりも今まで自分が歩いた思い出が目の前に浮かんで消える。今いちどつきたての餅がおはぎが食べたいなど、とりとめのない想いが過ぎて行く。

グラマン機が飛び去った。朝からの激しい戦いが終わり、真紅の太陽が南の海に沈みかかる。一時の平和が訪れた。人間はなぜこのような悲惨な戦いを繰り返すのか、間もなく二十三歳の命が終わりに近づこうと

している。果たして俺の死が本当に国のために役だったであろうか。この大きな戦争という渦の中で個人の死はあまりにも小さい存在だが、力いっぱい闘って死んだと伝えることの出来ないのが淋しい。

戦場に夕暮れが迫るころ、ようやく駆逐艦に近付くことができた。艦からは縄梯子や縄が多数垂らしてある。誰もが縄梯子にすがりつく。波がきた時はよいが、波が引く時には艦から離れそうになる。離れまいとして縄梯子を持っている人に抱きつく。上の人が下になり、下の人が上に浮き上がる、これの繰り返しだ。これでは助かる者も助からなくなると思い、艦から垂れている縄を体に巻きつけて、もう一人で登る力は尽きているので艦上の人に引き上げてもらった。

疲れ果てて上甲板に寝ていると、ヒュルヒュルと弾丸の飛んでくる音がしだした。「おい起きろ敵襲だ、敵の艦砲射撃だ」。直ちに戦闘配置についた。その時後続の駆逐艦は火柱を噴き上げて轟沈した。この艦に助けられた多くの兵士も、艦もろともであった。

敵巡洋艦の攻撃をさけて私達の駆逐艦は走る。まだ

海の上には救助されずに残った多くの兵士が声を限りに救助を求めていたが、停止することは出来ない。助けられた人、救助されなかった人、明暗を乗せて暗い海の中を走り続ける。今もなお救助を求める悲痛な叫び声が聞こえるようだ。戦争という極限の中での風は冷たい。

戦い疲れて朝まで泥のように眠った。

まぶしい朝日が昇り始めた。昨日の戦いが嘘のような穏やかな海が輝いている。こんな平和があるのだから昨日戦死された駆逐艦の兵士の水葬式が行われる。

水葬式は死者を毛布に包んで、浮かないように錘を付けて、同じ分隊の戦友たちに抱かれて、私達の見送る行列の中を「海ゆかば」のラッパの吹奏で後甲板より投水する。遺体を抱く人、見送る人、人それぞれの想いを込めて送る。若い命を祖国愛に捧げて南の海に散った兵士の魂よ安かれと祈ります。

ほんとうに人の生と死は紙一重、一寸先は闇だ。しかし人は明日を信じて力強く生き抜く努力の連続であ

る。この戦闘に参加した空母四隻は、全艦撃沈された。私達の「瑞鶴」は魚雷八本と爆弾七発を受けて最期を遂げた。

私の海軍生活の四年は、このように戦いに明け、戦いに終わったが、その間に人の命のはかなさと尊さと、また、たくましく生き抜く何ものにも負けない体験を少し学んだような気がする。

ある一通の封筒が届いた。裏を返したら「岐阜県美濃加茂市 渡辺賢之助」と書いてある。暫く考えてようやく思い付いた。なつかしい戦友の面影が浮かんできた。

亡き戦友の遺族を探し続けること三十年、敗戦の衝撃と生きることに追われた苦しいときに、八方手を尽くした深い戦友愛に心から感謝し、早速妻と二人で美濃加茂市の渡辺さんのところに行き、永年の戦友愛に心から御礼を申し上げた。渡辺さんが、永い間私を探し続けた物語は、これから始まる。

私も渡辺さんも共に空母「飛鷹」の乗員で、昭和十

九年六月二十日「あ号作戦」に参加、武運に恵まれずして船はマリアナ海沖にて爆沈され、多数の戦友と共に海底深く永遠に還らぬ最期を遂げた。

私達は運よく暗い海の中、味方の駆逐艦に救助されて九死に一生を得て、呉の三ツ子島に収容された。三ツ子島にて一カ月余り過ぎたある日、突然分隊士から集合がかかり十二・七センチ高角砲の一番砲手のみが艦船勤務を命ぜられた。他の兵員は大方陸上勤務となる。

そこで分隊士が「誠にお前達にはご苦勞であるが、今日本海軍ではお前達のような一番砲手としての歴戦の腕前が欲しいのだ、そこでここに四隻の艦がある。自分の好きなものを選んでくれ」と言われた。敗戦の色濃きとき再度戦場に向かう特攻隊だ、えーいままよ、どうせ無い命なら自分の墓場と決めるなら日本一の空母と「瑞鶴」に決めた。

渡辺さんとは「飛鷹」のときは知らなかったが「瑞鶴」に来てから同じ八番砲の一番砲手の左右の配置についてからが出会いとなった。戦局は日を追って我に

不利となってくる。ミッドウェー、サンゴ海、サイパン沖海戦と日本海軍の空母の数は一戦ごとに少なくなり、いま海戦に出撃できる空母は「瑞鶴」「千代田」「千歳」等四隻のみとなる、毎日の烈しい訓練が瀬戸内海沖で続いた。

食糧、弾薬、燃料を搭載、出撃準備完了、日本海軍最後の決戦部隊が九州の別府沖に集結、ここで最後の上陸が許された。ああこれがこの世の最後の大陸か、永年俺達を育てくれた祖国ともお別れか、二度とこの土を踏むことは出来まいと心ゆくまで祖国の味をかみしめて、青春の最後の時を楽しんだ。

艦隊は静かに輪形陣を組んで敵潜水艦の攻撃を警戒しながら豊後水道を通る。夕暮れの空に祖国の山々が次第にうすれゆく、白い航跡がどこまでも続いて見える。この航跡の上を歩いて今一度肉親のところに帰りたいような気もする。

「総員飛行甲板に上れ」。当直将校の号令により母国の山々に別れを告げる。「帽振れ」で飛行甲板は白い戦闘帽が花のように揺れる、万感胸に迫る、人それ

その想いをこめて振っているであろう、鬼の目にも涙とか……。兵士の目にも心なしかうっすらと光るものが見えるような気がする。

暮れゆく空に墨絵のようにうすれゆく母国の姿に、名残を惜しむ人の姿も一人去り二人去り、いつしか甲板には人影がなくなつた。

渡辺さんは出撃直前、体を悪くして内地の病院に入る、私は出撃ということで二人は別れたが、戦況の厳しさから二人の約束として、お互いにもしどちらかが生き帰ることが出来たなら、その時は両親に最後の模様を知らせる約束をしてあった。

その約束が一週間を待たずして実現した。日本海軍最後の全航空兵力も投入しての米艦隊との決戦が比島沖で戦われた。

戦局は我々に利あらず。空母「瑞鶴」は比島沖にて撃沈され、千数百人の乗員の半数以上が戦死をされた。渡辺さんはその報を知って、私が死んだものと思ひ三十年間も探してくださった。それが数年前、私達「飛鷹」の生き残りで結成された「飛鷹会」が三重県

で行われて、その名簿から私の生存が知れ、二度目の出合いが始まった。

お互い激しい戦闘に生き抜いた尊い命をこれからもより大切に守り、戦後五十余年世界に輝かしい発展をする日本の姿のように、私達も残された人生をより輝かしい自分なりの幸を求めながら、亡き戦友たちの魂よ安かれと祈っていきましよう。